

「舞踊と政治」

(司会) 尼ヶ崎 彬

このシンポジウム『舞踊と政治』は三浦雅士氏の企画によるものである。司会も初めは三浦氏が務める予定であったが、基調講演者が司会を兼務するのは適当でないということで尼ヶ崎が代役に立ち、その結果本報告の執筆も委ねられることになった。

これまで舞踊はその芸術性に関して語られることは多かった。また教育やセラピーの視点から語られることもあった。しかしなぜか政治的、社会的視点から語られることは少なく、舞踊学会においても主テーマとして取り上げられてこなかった。一見政治と舞踊とはあまり接点がないと見えたからであろう。しかし政治の起源はばらばらに生きる人々の統合にある。集団に秩序を与え、共同体としての安定をもたらすための技術であるといってもよい。その手段のひとつは福利の分配である。ここから「政治」を「希少資源の権威的配分」と定義する学者も出てくる。しかしこの考えには、各個人が功利的に行動する存在であるという前提がある。ところが人間は実はもっと不合理な動機によって行動する。憎悪とか、アイデンティティとか、無意識の習慣とか。ここに政治にはもう一つ重要な手段があることになる。それは身体や情念の管理である。たとえば、社会慣習からある人の前では常に平身低頭していると、いつのまにかその人に服従するのが当然であるという気持ちになる。あるいは一つ釜の飯を喰ったり、一緒に敵と戦うという経験をすると、善悪の理屈抜きで守り合う仲間となる。そして、同様の連帯感はある程度歌い踊るときにも生れる。孔子が礼楽を政治の基礎に置く理由である。舞踊を、身体にある種のコントロールを与えるものと考えれば、それは政治の手段のものである。

さて三浦氏の基調講演は大略次のようなものである。

「政治と文学」は20世紀、とりわけ戦後の文学や思想において大きなテーマとなったが、「政治と舞踊」はそうではない。舞踊家の戦争協力についてさえ、ドイツでは問題になったが日本では大きく取り上げられた形跡がない。しかしここではそのような表面的な問題ではなく、もっと根源的な問題を提起したい。これまで舞踊の政治性は正しく認識されてこなかった。じつは舞踊とは政治の原点である。なぜなら舞踊の政治学は身体政治学、つまり身体の管理の問題であるから。統治者

は常に人々の身体という非合理的なものをどう支配し、管理するかという問題に直面する。軍隊や学校における行動や制服がよい例だ。逆に統治者とは別の基準で自己のアイデンティティ管理を行おうとする者は、やはり自己の身体の自由な使用(身体加工や衣装)によってそれを表現する。近世初期のかぶき者がそうだ。だからこそ演劇や舞踊は常に管理の対象となり、同時に逸脱の表現メディアとなる。さらに個と共同体という原初の政治的問題がある。自己が個であるという把握も、自己が集団に属するという把握も、原初においては舞踊によってなされたと考えられるからである。これらの問題が典型的に現れているのが、ナチス政権下のドイツである。ベルリン・オリンピックやナチスのさまざまな行事において舞踊は大きな役割を与えられ、それに多くの舞踊家が参与した。それを単純な善悪図式で裁くのは簡単だが、舞踊と政治の根源的なかわり方を考えるときさらに深くこう問うてみるができるだろう。ラバンやウイグマンの舞踊には本質的にナチスに通じるものがあり、むしろそこにこそ魅力の核心があったのではないかと。

この講演をうけて渡辺裕氏は、日本の近代に焦点をあて、次のような報告を行った。

まず明治政府が「国民」に与えようとした「近代的身体」がある。しかし「民謡」や「郷土舞踊」の近代史をみると、実はそれらは個人と国家の中間共同体である「郷土」のシンボルとして近代に発見・「改良」されたものである。しかもそれらは地方文化として「日本文化」に編入されることで、近代的国民国家の形成に関わっていた。

次いで副島博彦氏は三浦氏の講演の中のドイツ表現舞踊に焦点を絞り、詳細な報告を行った。すなわちそれは19世紀末に始まる生活改革運動を背景に発しながら、やはりここでも国民国家ドイツという「想像の共同体」の形成に与り、さらにはナチスの文化政策に組み込まれていったのである(別稿参照)。

その後参加者により活発な議論が行われたが、残念ながら問題の大きさに比べて時間が乏しく、身体と政治の関係が深く大きな広がりをもつこと、その中心に舞踊があることを確認するにとどまった。